

をしていたんですね。ところがかなり遠くの方に御三階櫓が小さく見えたので、そこを水攻めするぐらいの堤防を造るのって、どれだけ壮大なんだよと驚きでしたよね。それから、忍城の周辺にも戦国時代の忍城をしのばせるようなところがあって、諏訪曲輪なんて、いいのが残っていたなというのはありましたね。

市長 石田三成が水攻めの際に築いた堤や陣を張った丸墓山などが、今でも現存しています。時代、時代の物が行田には残っているわけです。



石田堤

和田 行田は、古墳をはじめ大昔の物があるし、昔、城下町だった雰囲気があるんですね。その空気感みたいなのが、行田の魅力の一つじゃないかなっていい

うに思いますね。突如、できた都市じゃなく、何百年もかけて磨きあげたようなものが、いかにも昔からあった城下町の雰囲気を出しているなという感じはしますね。

市長 そうですね。市街地を見ても非常に道が狭くて、城下町独特のまちのつくりが残っています。雰囲気として感じるというのは、そういうところかもしれないですね。



映画撮影と行田の盛り上がり

市長 映画の撮影も昨年11月に克蘭クアップを迎えたと聞きましたが、和田さんは撮影現場をご覧になったそうですね。

和田 僕は脚本家として現場に臨むので、「ちゃんとやっているんだろかな」というほうがどちらかというとき大いですが、だから、見に行ったら感動しましたっていうんじゃないんです。「監督、ちゃんと

カット割りしているんだろかな」とか、「勝手に脚本変えてないんだろかな」とか、そういうようなことをリアルに感じながら見えていますね(笑)。

市長 私も10月に京都での撮影の際にお邪魔しました。監督や俳優たちと話をする機会があり、皆さんの情熱というか熱いものを感じました。撮影現場を目の当たりにして、本当にこれはいい映画だ、絶対ヒットすると確信しました。念願であった市内での映画ロケもあり、多くのエキストラやボランティアの方々が、生き生きとした表情で撮影に臨んでくれました。

和田 苫小牧のロケで合戦シーンを撮ったんですけども、アクションシーンというのは、通常のシーンよりも細かく撮るので、すごく時間がかかるんですね。あまりにも大変で、スタッフもくたくたになっていたらいいんです。撮った映像をつないだらッシュというのを、ホテルなどで見るんですけど、それを見た正木丹波守役の佐藤浩市さんがスタッフの士気を鼓舞するため、「スタッフに見せなきゃだめだ」と言っていたらしいんです。つまり、そのくらいいいラッシュが出たんですよ。僕は基本的に全部文句を言うから、僕には見せないようにしているの、見ていいですけど(笑)、本当の意味でちゃんとしたものを撮っているんだと思います。



さきたま古墳公園でのロケ風景

市長 今年秋の公開が待ち遠しいですね。映画化によって行田の歴史ストーリーがスクリーンに映し出されて、全国に向けて行田の魅力が発信されるわけで、市内ですでに「のぼうの城」の効果が出てきているんです。最近、行田を訪れる人が増えたり、テレビなどのメディアが頻繁に行田を取り上げてくれたりして、まさに活力が出てきました。「忍城おもてなし甲冑隊」を結成し、忍城址を中心に市外へ積極的に出向き行田のPRを行っているし、商店会連合会でも小説の主な登場人物を「忍城の精鋭五人衆」としてキャラクターデザインしたり、独自のイベントを開催したりして、いろいろな面